

2010年
10月27日
水曜日

原田哲史 教授(文化と社会の経済学)

カール・ブラント先生の死 (2010年10月19日)を悼む

基礎演習でデイベート大会のテーマ「テレビは子供に悪影響を与える」について説明していたとき、ふと留学中(ドイツ・フライブルク大学経済学部)の恩師カール・ブラント先生のことを話した。

「子供の頃、テレビ番組「コンバット」が好きだった。アメリカもので、第二次大戦末期フランスに入ったアメリカの部隊がドイツ軍を打ち破っていくドラマだった。その頃、戦争ごっこでその軍曹の役をやってドイツ兵を機関銃でやっつけるのが快感だった。けれど、20代後半の長いドイツ留学の中で、その意識が浅はかだったと反省した。ついていたブラント先生は戦争(ロシア戦線)で片目を失明されて、学者として苦勞されていた方で、にもかかわらず自分にとでも親切にしてくださったからだ。ナチス・ドイツは悪かったが、末端のドイツ兵は同じ人間として痛み・苦しみをもち、暖かいハートをもつ人間だったという当たり前のことを改めて実感したからだ」と。

1987年、夏が始まった頃、最終的に2000ページ余りになる博士論文を書いていて、書けた章は先生に見てもらい、手直ししてもらっていた。けれど、その頃、婚約者(現在の妻)には「結婚式までに博士論文を完成させて提出する」と言っていたのに、式が近づいても論文ははかどらなかつた。

そんなとき大きな失敗をした。ブラント先生が細かく手直ししてくださった書込み原稿およそ50ページ分(フィヒテの経済哲学の章)を、先生の研究室でいただいた後どこかに置き忘れて、なくしてしまった。家でカバンの中になかったので、来た道をたどってみたが、見つからない。この大きな部分がダメになると、博士論文を結婚式までに完成させることは無理だし、そもそもブラント先生は良い方の目も使いすぎで悪くされ、腎臓結石と高血圧で体調を崩されて、教授会も休まれたりしていた。そんな先生に直していただいたものをなくすのは申し訳ない。1週

間ほど守衛さんに尋ねたり、「見付けた人はお電話ください!」と張り紙をしたり、警察で落とし物を探ねたりして、探しに探した。けれど出てこない。

そこで、どれだけ怒られてもしょうがないと覚悟して、研究室に再度ブラント先生を訪ねて、心から謝った。すると先生は怒ることなく、「昔は助け合いの精神(Solidarity)があったから、落とし物は届けるものだった。今はそれがなくて残念だ」と言われ、「直す前の原稿のコピーはありますね。もう一度やりましょう」と言われた。先生のこの優しさに、かえって「すまないことした!」と深く思った。怒られていたらふっ切れたかもしれない。けれど、病気がちの先生のそのご厚意に申し訳ない気持ちが収まらなかつた。その後、先生からフィヒテ章の再手直しを改めて受け取り、その結果、博士論文の執筆は進み、結婚式の1日前に完成した論文を提出し、花嫁への約束を果たすことができ

た。ブラント先生は多くのその約束を知っていたし、博士論文の完成を条件としてほしいの日本での就職の審査が行われていたこともご存知だったので、それらがクリアできるようにとご配慮くださったのだ。

留学中は、考える力はあるのに聞く・話す・読む・書くことでは同年代のドイツ人に比べてハンディキャップがある。ブラント先生は片目の失明という障害をもっておられたから、留学生のほくをよく理解してくださったのだろう。小学生の頃に「コンバット」でドイツ兵をやっつけることを楽しんでいた自分はアホだった、とつくづく思った。やられた元ドイツ兵にこれだけ親切にされたのだから。

先生は、その後も病気がちだったが奥さんの献身的な看護でもって長く一緒に生活してこられた。そして、なんとその授業の2日前の10月19日に87歳で永眠されていたことが、すぐ後で分かった。23日が葬儀とのこと。最後のご挨拶をしたと思う。■